

# 春の交流会

新潟市 田中 幸子（西城町出身）

荒を南野 際に開かん  
抽を守つて 田園に帰る。

暖暖たり 遠人の村  
依依たり 墟里の煙。

久しく樊籠の 裏に在りて も

復た自然に 返るを得たり。

と、うたいました。…ふるさとは遠く離れて いるほど、その想いは強く深いものな のかも知れませんね。

## 回想…

四月十四日(木)は気温「十三度の晴天でした。私が生まれ育った「ふるさと」高田を離れて幾十年経つたのでしょうか…高田駅は昔の面影が全くありません。駅周辺の建物も同様です。私は一抹の寂しさを抱きながら、高田駅前からタクシーで交流会会場の「なかしま食堂」へ向かいました。タクシーが西城町を通り過ぎて人家が疎らになったその時、何と言つことでしょう！夢にまで見た桜の木々が昔のままの美しい姿を堀に映して、私を優しく迎えてくれました。見事に咲き誇った薄桃色の桜花！その美しさに、遠い…遠い幼い頃の思い出が呼び起されて、ノスタルジックな気持ちになりました。

十歳の頃の私…父と一緒に寒釣りを楽しんだ外堀は…雪が降り積もつて凍つづくような寒さでした。



「一尺ずれたらアタリは無い…」と寒鮎釣りの時の父は「癖のように言いながら鮎がいそうな水深い場所をこまめに探していました…懐かしい…バーチャルと/orアルの空間の世界に蘇つた私…

その昔、晋の時代の詩人、陶淵明が「ふるさと」田園に帰去し、甦生のおもいで

## 「なかしま食堂」花見の宴

午後二時、いよいよ「春の交流会」の開催時間となりました。私は初めての参

加です。上越市長村山様のご挨拶の中で、

被災地の皆さま方の避難所ごとの避難者受け入れについてのお心配りを伺い、市

政の温かさを深く感じました。(この温

かい街で被災者の皆さまが一日も早く元

気を取り戻して欲しい…)「ふるさと」

ネット」の会長和久井様も被災地の皆さ

ま方へお心配りをされながらも春の交流

会を開催して下さり、「ご挨拶の言葉は会

への想いと云の皆さまを心から愛さ

れていらっしゃる、その温かいお人柄に

心打たれました。

お酒を酌み交わし、「観桜の宴」もたけなわとなる頃には同席の方々が母校の先輩後輩であることがわかり、老若男女、



年齢も超越して和気藹々の中にも和やかで楽しい時間が流れました。「来てよかつた！」「ふるさと上越に！」楽しげ嬉しさ懐かしさが胸中いっぱいに広がりました。いつの間にか時刻は午後四時に会はお開きとなりました。誰かが「集合写真」と叫んでいました。皆さんで一列に並んでパチリッ。美しく撮つて下さいね、なんて(笑)無理な注文は云えません(笑)(それなりに撮れたはず)「時間です…」多くの方々にお見送りをいたしました。「また会いましょうね」と

…宿泊組の私たちはマイクロバスに乗りましてお別れを惜しみながら「なかしま食堂」を後に風巻神社へ向かいました…

## 風巻神社参拝

風巻神社は、牧区と安塚区を結ぶ国道四〇五号線沿いにあります。風の神を祀る風巻神社です。山間部は厚い残雪に覆われていて、別世界に迷い込んだと思うほどで、先刻まで桜花を眺めていたことなど嘘のような景色でした。驚いている間にバスは「風巻神社」の拝殿前に到着。寒い！兎に角寒い！拝殿前の「狛犬」の厳めしい表情も：寒そうに並んで見えました…精巧な彫刻で目が釘付けになるような特別な建物であるわけではない風巻神社ですが、何か独特の空気感がありました。見渡す限り樹高二十メートルは越えていくと思われる杉の木が山の斜面に立ち並び、静寂な境内は身が清められる感がしました。風巻神社の創建は天暦二年（九七八）に大和國の龍田神殿の分霊を勧請したのが始まりとされ、創建当初は山頂に鎮座していましたが宝永二年（一七〇五）に火災によって社殿が焼失し、宝永四年（一七〇七）に、山麓に再建した神社だそうです。昭和三十一年地滑り災害にて現在地に遷座しています。



深山荘（上野市・旧牧村）

午後五時過ぎバスは、上越高田の町から妙高・黒姫の山々を右手に見ながら、牧村へ：牧村から三叉路を右手に向かって一本道を走ると高台に深山荘が見えてきて、そこから五分くらいで到着しました。「いらっしゃいませ」と宿の人たちの温かいお出迎えを受けて部屋に。「先にお風呂に入る？」「少し休む？」「浴衣着る？」、「お茶にする？」「食事時間何時？」、「食事の部屋は？どこだけ？」



専敬寺は貞観一（八六〇）年に真言宗寺院として開創したと伝えられていますが一二五六年に淨土真宗に改宗しています。創建以来大きな火災が五度もあり多くの宝物を焼失しています。現在の専敬

太鼓橋を渡ると神奥舎があり、二十人位で泊ぐと思われる素朴な感じの御輿が収納されていました。毎年この御輿を担いで百十四段の階段を登る「風巻神社の大祭」が、何と千年も続いていると伺っています（笑）。先ずは急ぎ温泉へ：深山荘の驚きました。凄いと思いませんか？…凄いです！

温泉は宝曆七年（約百四十年前）源泉発見という歴史ある温泉で、単純硫酸黄冷鉱泉ですが、無色透明無臭でした。大きなガラス窓が開放的で、眺めは素晴らしい！露天風呂があるともつといふに…と思いました。その日、窓から眺めた景色は季節はずれの感動的な美しい雪景色でした。夜の懇親会は目を見張るような種々のご馳走が膳に並んで、飲むほどに酔うほどに話に花が咲きました。話は尽きず食後は別室に移動（笑）：あつという間に時間が過ぎてしましました。食べ過ぎ飲み過ぎでチヨット記憶が：部屋に戻って温かいお布団で夢の中へ…

二日目、朝食も美味しく頂きました。朝九時、「これから専敬寺に向かいます。さあ、出発です！」雪景色が続きました…マイクロバスの運転手さんが道路を行き過ぎて…「あれ？」残雪で辺りは白一色のため、見慣れていたはず…道路を見失してしまい…「バック オーライ…」（ご安心下さい）無事、専敬寺到着しました。

## 二日目 専敬寺へ

二日目、朝食も美味しく頂きました。

朝九時、「これから専敬寺に向かいます。さあ、出発です！」雪景色が続きました

…マイクロバスの運転手さんが道路を行

き過ぎて…「あれ？」残雪で辺りは白

一色のため、見慣れていたはず…道路を

見失してしまい…「バック オーライ…」

（ご安心下さい）無事、専敬寺到着しま

した。

寺は明治初期の建造物で総ケヤキ造りで  
県内指折りの重厚な大寺でした。広い廊

下は…少し暗いので段差が気になつて  
「ここ…段差がありますので気をつけて  
ください」「はい…」「ここは…段差です」  
「はい…有難う」後から来る人に「一々言つ  
ている…私…自分自身が可笑しかつたで  
す。お寺では、お茶と自家製のケーキの  
温かいおもてなしを頂きました。ご馳走  
様でした。(合掌)

る。「お物菜は…」「山うどの佃煮と、山  
芋こんにゃくと…まあ！美味しいそうね」

(笑)「皆さんには何を買いましたか？」人の  
ことを気にしているほど時間が無いで  
すよ。「早く買いましょう」「お漬け物、  
味噌漬けコーナーどこかな…」旅行中で  
あることを忘れていつの間にか家庭の主  
婦感覚に戻っている(笑)エプロンを着けて  
いないだけですね(笑)(エプロンを着けて  
いないだけですね(笑)



上越市安塚区所在の雪だるま物産館。  
地元の農家が心を込めての手作り品物  
が、店内いっぱいに陳列していました。  
「お買い物…お買い物…」時間が気にな



竹之内草庵  
境内の右の奥には竹之内草庵が建つて  
います。親鸞聖人が流罪となり、越後の  
国に流れ着いた後に境内の五仏のそばに  
草庵を結び聖人が住まわれました。その  
草庵が竹に囲まれていたので、竹之内



本堂は「檜かんな」仕上げの総檜造り  
です。鎌倉時代の様式で外見は簡素です  
が内部は重厚な造りでした。「五智」名

## 仁王門

国分寺の境内に足を踏み入れると最  
初に目に入るのが仁王門：この仁王門

は天保六（一八三五）年、能生町の七  
郎左衛門が中心となり再建し、天保七  
（一八三六）年、名立町の長井要吉と弟  
子一人により製作されたそうです。

## 三重塔

仁王門を潜ると右手には、幕末に着工  
し、未完成で終わった三重塔（県文化財）  
が未完成ながら美しい姿を見せていまし  
た。壁面に石倉正義鏡が彫り上げたとい  
う、十二支と中国十二孝がはめ込まれて  
いるのが印象的でした。



信により現在の場所に再興されたそうです  
が、その後も幾度となく災禍を繰り返  
して、昭和六十三年にも焼失し、平成九  
年から十年もの歳月をかけ、地元住民の  
多大な芳情によって再建となりました。

## 五智国分寺（本堂）

「住職の奥様から国分寺の本堂で、國  
分寺の沿革を拝聴することができます」

た。五智の国分寺は天平年間に聖武天皇

勅願より日本全国に建てられた国分寺の

一つで、永禄五（一五六二）年、上杉謙

信により現在の場所に再興されたそうです。

前通り大日如来、薬師寺如来、法正如来、釈迦如来、阿弥陀如来の五体の如来が祀られることで五智と云われています。

本堂を出ると陽が高くなつて、木々の葉がやわらかい春の日射しに透過して美しかつた。そよ風を受けながら国分寺の境内を歩くと国分寺ならではの趣に出会つた気がしました。

### 「割烹みなとせ」・昼食

昼食は「割烹みなとせ」に行きました。部屋はとてもセンスのいい造りで、別世界に居るような、そんな気持ちにさせられました。三方がガラス張りのライドルームで、視界が広がり、雄大な日本海を眺めていると、潮の音、波の音が伝わって来るようでした。

打ち寄せる波を身近に感じながら頂くお食事は、それはもう、格別の味でした。地平線の向こうに沈みかける夕日を想像しました。赤々と燃える夕日・金色に輝く海・船を漕ぐ人・歩く人たちのシシリット…そんな季節にもう一度、来たいな、と思いました。丁度、食事の途中で、「みなとせ」を設計された方がお見えになりました。座が一段と盛り上がり楽しくなりました。食事の後、バスは直江津駅へ、駆前ではご婦人が一人マイクロバスに乗車されました。何故か…一寸気になる横

顔…どこかで会つたような…そんな気がして…



### 「鮎正宗酒造」蔵元

バスは、鮎正宗が生まれる酒蔵元の静かな山あいに向かいました。午後一時三十分過ぎ、バスは、長野と新潟の県境にある猿橋集落の「鮎正宗酒造」に到着。そこは、新潟県でも有数の豪雪地です。入口に堂々と立つ樹齢四百年の大ケヤキを見せてから、築百四十年という立派な茅葺き屋根の建物の中に案内されました。蔵の中には湧水が、醸造を始めてから現在まで、百三十四年余の間の歳月を経ても噴水し続けていました。試飲の前に、その蔵の中に湧き出す仕込み水を頂いてみましたが、さらりと滑らか

かで、すっきりとソフトな味わいのする、越後の山の雪解けならではの軟水でした。「越後富士とも称される妙高山の山系から時を経て蔵内」に湧き上がる良質な湧水と地元新潟産の酒米を用いて恵まれた自然環境の中で新潟清酒には少ない切れが良く、軽い甘口タイプの旨味がある酒造りに取り組んでいます。」と、説明を受けました通り、帳場には、本醸造「鮎正宗」を始め、限定生産の「大吟醸鮎」、

湧水仕込みの「特別純米酒鮎」などの、「鮎正宗」各種あつて、あれこれと試飲すると、どれも「あたりがすっきりしていて、氣品がありました。端麗な甘口（旨口）の風味で心地よく、のどをさうりと通り抜けていきました。



### 道の歴史館（関川の関所）

昔は御駕籠でエイツサ！ホイツサ！現代は車で移動！関川の関所を訪ねました。五街道（東海道・中山道・日光街道・甲州街道・奥州街道）に次ぐ重要な交通路として発達した北国街道。「道の歴史館」はその北国街道の要であった関川の関所を当時のままに再現したのだそうですね。江戸時代、幕府は全国に五十四カ所の関所を設け、関川の関所は、高田藩の管理する越後三関の一つで加賀藩などの参勤交代行列と、佐渡産金の両方が通過するため非常に重要な関所で、取り調べが厳しかったといわれます。一般的の通行人は、表番所で「通行手形」と「人改め」が行われたそうです。高田藩より、一人の役人が常駐していました。（等身大人形で再現）歴史館内の右側にある細長い土間を通り、一旦外に出ると、もう一つ

良質の水と酒造米は県内産「五百万石」を主に使っているために、すっきりした飲み口に仕上がっていました。操業は戦時中も休まず行われ、明治八年の創業から現在まで何と、一日も休まず操業し続けてきたそうです。「新井市隨一」の蔵元だと言われる鮎正宗酒造は、数少ない歴史を持つ蔵元だそうです。（お土産用に数本を自宅へ宅配依頼致しました。皆さまも如何ですか？）

ある奥の土間に入る。そこでは、人見女<sup>の</sup>の取り調べの様子が再現されていました。(等身大人形で再現)



川の「一の橋」の架け替え工事が行われました。平成十年春、関川改修により関川の数、出発地、目的地の他、体の特徴や、髪型まで厳しく記されていたそ

うです。守居役によつて管理・発行され、手形には、発行者の印判の他に、通行人数、乗

り物の数、出発地、目的地の他、体の特徴や、髪型まで厳しく記されていたそ

うです。平成十年春、関川改修により関

川の「一の橋」の架け替え工事が行われ

て、新しい橋を「長寿橋」と名付けたそうです。また、この街道は江戸時代、佐渡から「金・銀」を江戸に運んだ道たつことから、長寿橋の「長寿」と「金銀」をかけて「ぎんさん、ぎんさん」の象を作り、ご本人たちから除幕してもらつたのだそうです。「ぎんさん、ぎんさん」の手形もありました。(歴史館に是非一度訪ねてみてください、何か発見できるかも知れません。)

### 「金型あかくら莊」

直江津駅前でバスに乗車された、あの気になるご婦人に、思い切つて話しかけましたら、何と! 母方の又従姉妹でした。再会! 何十年振りの再会でしようか? 互いに、その奇遇に大変驚き、喜び合いました。午後五時三十分過ぎ、バスは「金型あかくら莊」に到着しました。[金型あかくら莊]は冬はスキー場として有名で、日本海へも近く、夏には高原リゾートと海水浴を一度に満喫できる保養施設だと聞いておりました。然し、実際に建物の内に入つて驚きました。そこはとても素敵なものでした。部屋は3室もあって、ゆとりの空間が贅沢です。ここは本当に保養施設ですか? つて、思つほどでした。温泉にゆつたり入り、美味しいお酒と、新鮮な料理を口にして、皆で、至福の気分でした。

金型あかくら莊を設計した方は「割烹みなどせ」を設計された方と同一人物! でした。その豊かで鋭い感性と、獨得の会話は楽しく、どんどん引き込まれてしまふほどの魅力ある人物でした。地下には大きな多目的ホールや会議室、使い勝手のいい設備が整っていました。カラオケルームでは、上手下手は別として(笑)、みんなで存分に歌い、楽しめました。(樂しかったですよ)(笑)

手のいい設備が整っていました。カラオケルームでは、上手下手は別として(笑)、みんなで存分に歌い、楽しめました。(樂しかったですよ)(笑)

クローズアップ「ルバーブ」商品あれこれ…売店を覗くと、「ルバーブ」の文字を見かける。ルバーブクッキー、ルバーブジュース、ルバーブキャンディ、ルバーブジャム。しかし、この「ルバーブ」って果たして何だろう? それは、シベリア南部原産のタデ科の植物だ。薬草ダイオウの仲間。野尻湖畔の国際村に避暑に訪れていた牧師が種を持ち込み、ここ信濃町が育てるのに適した土地であると判断したことから、産地化されたものらしい。ルバーブは、繊維質と有機酸が多く含まれた健康食品でもある、とのこと。(店内説明を要約) 体にいい感じがする。お土産はクッキーとキャンディにしました。



### 三日目 道の駅「しなの」

天気は下り坂で、少し雲が多くなつてきました。道の駅「しなの」は明るい雰

#### 齋藤陶齋さんの窯場見学

バスのワイパーが動き始めた・生憎の雨になつてしましました…新潟県上越市高田区寺町の陶芸家の齋藤陶齋さんをお訪ねして作品をご紹介頂き、登り窯を見学させて頂きました。初代の齋藤陶齋さんは、柄尾(現長岡市)生まれで、京都

で近藤悠三、富本憲吉の二人の人間国宝に学び、戦後は当時の高田市に定住されました。兄の齋藤圭三さんが寺町で、久昌寺(きゅうじょうじ)の住職をしていましたので昭和二十一年にたよつてこられたそうです。昭和二十三年に窯を築いて、陶器も磁器も焼いたそうです。椿絵を最も得意とした柄で、色絵の磁器の皿や壺にはすぐれた作品が多く、白磁や灰釉(かいゆう)など、絵のない作品も多くあり目を見張るものばかりでした。陶齋を号とし、斎藤陶齋ともいいます。今は息子さんの斎藤尚明さんが陶齋を襲名しておられます。現在の陶芸はガス窯、電気窯が一般的に用いられているそうですが、登り窯は安土桃山時代頃からの伝統的な焼成方で、駱駝の瘤(よの)のような半円状の焼成室が三室、斜面に沿って階段状に連結していました。最初の「一の間」に続き、「二の間」「三の間」と熱が上へ上へと登つて行く性質を上手く利用して最上部の部屋の先には煙道があり、最後は煙突へと続いていました。各焼成室に新を投入する六が儲けられており、作品は大量生産に向いていたそうです。焼成温度は最高で三百度C前後に達するそうです。屋外に大量の煙が立ち上るため火事と間違えられないように、予め消防署に連絡して焼成を行つたそうですが、何よりも大変なことは、一週間以上も焼成を続

けるための膨大な薪と費用だったそうで、外は冷たい雨が降っていることも忘れて、焼成の奥深い未知の世界から生まれる作品に、夢心地でいつまでも見入ってしまいました。



春日山「見晴らし屋」-昼食-

外は冷たい雨・陶齋の夢から冷めて。バスは春日山に向かいました。雨足は先刻より強くなつた感じがする。バスから降りて小走りに「見晴らし屋」に急ぐ。春日山城跡に位置する小料理屋の窓から、雨に濡れる上越の街並みが一望できました。上杉謙信公も眺めたであろう景色を望みながらの食事です。旬の食材を使い、季節感を生かした料理を存分に楽ししながら、会話を弾みました。箸袋を

開くと高田の四季と春日山音頭の歌詞が印刷されていました。高田の四季の「冬の歌詞」が思い出せない(笑) : 簿袋は春と夏しか印刷されていて秋と冬が印刷されてないので、みんなで思い出そうと、だんだん真剣になつて考えてしました(笑)



「上越観光物産センター」へ

バスは春日山に向かいました。雨足は先刻より強くなつた感じがする。バスから降りて小走りに「見晴らし屋」に急ぐ。春日山城跡に位置する小料理屋の窓から、雨に濡れる上越の街並みが一望できました。上杉謙信公も眺めたであろう景色を望みながらの食事です。旬の食材を使い、季節感を生かした料理を存分に楽ししながら、会話を弾みました。箸袋を

「おまんた きない ふるさと上越に!」

「おまんこを小さく平に丸めて串に刺す。表面を軽く焼いて寒天で照りを出したも

す。上越観光物産センターのふるさと展示・販売していました。継続だんこは、コーナーでは、四季折々の海・山の幸など、上越の物産・特産品を一堂に集めて

風が強く吹いていた・最後の買い物で花のように、この素晴らしい「上越の地」に皆で集つて元気な「桜花」を咲かせました。有難う御座いました。心から御礼申し上げます。毎年咲き続ける美しい桜花のように、この素晴らしい「上越の地」に皆で集つて元気な「桜花」を咲かせ

す。ひと串に直径三四の一口大のだんご四個が通してある。そのかわいい姿が、懐かしくなりお土産を買いました(笑)

これが昭和三年に出版された林美美子の自伝的小説『放浪記』で、躍有名に「直江津についた、港の駅なり。駅のそばで団子を買った。「この団子の名前は何と言うんですか?」「へえ、継続だんごです。」「継続団子? 団子が続いているからです」「……継続だんごの素朴な味が、林美子に生きる力を与えたというわけ。最後の買い物もあれこれ買った: 直江津駅へ向かいました。バスは直江津駅前に到着。手を振つてバスをお見送りしました。バスから降り立つた人たちも、新幹線や高速バスの時間です: お別れです: 春の交流会は私にとって出会いと感動の連続でした。温かい心のふれあい。笑い: 神社仏閣巡り: 車窓から見た野山や雪景やバスから降り立つた人たちも、新幹線や高速バスの時間です: お別れです: 春の交流会は私にとって出会いと感動の連続でした。温かい心のふれあい。笑い: 神社仏閣巡り: 車窓から見た野山や雪景やバスから降り立つた人たちも、新幹線や高速バスの時間です: お別れです: 春の交流会は私にとって出会いと感動の連続でした。温かい心のふれあい。笑い:



専敬寺の大黒柱

専敬寺での説教



鯛正宗酒造の天然湧水



深山荘では紙芝居もありました



関川閣所の歴史観



鯛正宗酒造の御神木



金型あくら荘でのカラオケ大会



田中 幸子さん